東日本大震災　八戸市の記録

第12章

被災者の声

第12章 被災者の声

12-1 東日本大震災を振り返る

東日本大震災の発生から1年半が過ぎました。八戸市では少しずつ復興が進んでいますが、被災された方々にとっては、津波に襲われた衝撃や、その後の避難生活の記憶などは決して忘れられるものではないと思います。ここでは、被災された方々に当時の状況を振り返っていただき、また、現在の地域の状況についてもお話しいただきました。

【Aさんのお話】

- 地震があった時は自宅にいましたが、正直、津波は来ないと思いました。でも、20分くらいしたら消防や警察の人が来て、避難してくださいと呼び掛けていたので、近くのお年寄りを3人連れて、公民館（避難所）に向かいました。
- それから2回津波が来て、その後に自宅に戻ってみたのですが、途中で自宅じゃない所に自分の車があったのを見つけました。「なんでウチの車が？」と思いましたが、津波で流されてきたんですね。とんでもないことだと思いました。
- その後は、実は避難所には行かず、自宅の2階で生活していました。1階はひどい有様でしたが、2階は何とか住める状態だったので、ずっとそこにいました。
- 公民館が避難所になっていて、他の町内の皆さんや関係者の方々が動いてくださいました。「避難所の運営は私たちに任せて、沿岸の町内は自分たちのことを優先してくれ」と言ってくださったのは、とてもありがたいことでした。
- 家の片付けから始めましたが、とても大変でした。石灰や土のうがたくさん必要だったのですが、市に電話しても「取りに来てください」とのこと。集めて管理している長根運動公園まで行くのは一苦労です。しかも長根に行ったら、朝の8時半でも誰もおらず、職員が遅れてきました。非常にがっかりして憤慨しました。もう少し、被災者のことを考えていてほしかったですね。危機管理の体制がちゃんとできていないとも感じました。
- 避難所には、後でいろいろな物資が届きましたが、避難所に来れない人もたくさんいたと思います。自宅や地域の片付けを一所懸命にやっていた人達には、食事の支給などの支援がありませんでした。
- ただ、ゴミの回収や側溝の泥上げなどの市の対応は素早かったと思います。
- 地震をきっかけに、町内の人達の顔を覚えたという良い面もあります。今は防災への意識も高くなっていると思います。

【Bさんのお話】

- 当時は別の地域にいて、地震があった時は街路樹につかまっていました。その後ですぐ自宅に戻り、お隣の高齢の方と一緒に館鼻公園に避難しました。
- 公園から、津波が上がってくる様子が見えました。何が起こっているのか、信じられない状況でした。その後、一度自宅に戻り、一日だけ避難所に行きましたが、冬だったのであまりに寒く、夜は車の中で暖房をつけて休みました。
- 避難所では、消防の人や市職員に状況を聞いても「何も分からない」と言われ、いらだったのを覚えています。
- 避難所への支援は手厚かったのですが、被災して自宅や近所を片付けている人達への支援はほとんどありませんでした。片付けをしていて、体を壊してしまった人もいます。もう少し現場の状況を良く見て、必要な支援をして欲しかったと思います。

- 後になってボランティアの人達が手伝いに来てくれましたが、食事を準備されてなかったので、町内でお弁当を用意しました。お手伝いはありがたかったのですが、町内の活動費にも影響が出るので、食事くらいは準備してきて欲しかったのが本音です。
- 正直、私自身も他の所の片付けを手伝いに行く余裕はありませんでした。地域の生活館を片付けるので精一杯でした。
- 公共の建物には、普段から救援物資を置いておくべきだと感じました。せめて、3日分くらいの食料と水、できれば毛布など、各所に分散しておく必要があると思います。
- 最近、小学校で震災のことを話す機会があって、とにかく学校か公民館に逃げなさいと言いました。家族で話をして逃げる場所を決めておいたりしておくことも大事。生きてさえいれば、必ず会えますから。

【Cさんのお話】

- 地震の時は友達の家に遊びに行っていました。すぐ自宅に戻りましたが、近所の方が早く公民館に逃げた方がいいと教えてくれたので、貴重品などを持って公民館に行きました。
- 公民館に着いた頃に津波が来たようです。私は津波の様子は見てません。逃げるのに精一杯でした。今となれば、津波を見なくてよかったと思っています。避難所には、大分お世話になりました。
- 後で自宅に戻ってみましたが、ひどい有様でした。片付けも大変でした。ボランティアの人にも手伝ってもらいましたが、ほとんど一人でやりました。
- 今は別の所に住んでいますが、そこに引っ越すのが大変でした。荷物を持って、何度も往復しました。それから、今の所には友達もいないので、誰かと話をする機会がなかなかありません。

【Dさんのお話】

- 寝たきりの父がいたので、どうしようかと思いましたが、施設の方が来てくださったので助かりました。そのことで、地域を見てまわることができました。
- 一番困ったのは停電でした。どこからも情報が入らない。防災無線もまるで役に立ちませんでした。ただ、今までも様々な災害にあっているので、何かあったらとにかく逃げることにしていました。地域の人達もそういう意識があったと思います。
- 私が担当した避難所が解散になるまでの4日間、自宅には帰っていません。でも近所や知り合いの皆さんが自宅に来てくれて、片付けてくれたそうです。本当にありがたいことでした。
- 避難所に家族や親戚を尋ねてくる人もいましたが、正直、誰が避難してきているか、始めのうちは把握できなくて、何もお伝えできませんでした。後で名簿を貼り出そうかとも話し合いましたが、人がいない家に空き巣が入ったりすることもあると聞いたので、なんともできませんでした。
- 避難所はプライバシーもあまりないので、皆さんストレスがたまっていたと思います。物資もたくさん届いて、本当に良くしてもらったと思いますが、あまり良くしてもらいすぎると、段々と「あれもこれも」と言うようになる雰囲気もありました。
- 津波で流されて道路を塞いでいた車があって、どうしようかと思っていたところにパトカーが来たのですが、「所有者の許可がないと手を付けられない」と言われました。災害時なので、もう少し柔軟に対応できないかと感じました。
- ボランティアの方々に協力してもらって、ヘドロでひどい状況になっている地域の消毒作業をしました。大変喜ばれましたし、地域の人達がその作業に携わったのは、とても良いことでした。
- 最近、新しい防災無線がつきましたが、今の場所では地域住民には聞こえないと思う。行政の話では、海側の会社や工場で働いている人に聞こえるようにとのことで、住民はテレビやラジオで情報収集をとのことだった。もう少し地域の意見を聞いてから設置してほしかった。しっかり現場を見てほしいですね。
- 地域には自主防災会がある。その活動をもう少し見直して、自分たちのことは自分たちで、必要があれば行政にお願いするという考えがなければいけないと思う。ただ、今後災害があった時には、行政には地域にいち早く情報を流してほしいと思います。